
トモダチ

ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トモダチ

【Nコード】

N8379W

【作者名】

ユウ

【あらすじ】

「あたしと翔太は幼馴染。なんでも言い合える仲だし、一緒にいてすごい楽。」

「俺と杏奈は幼馴染。多分俺らの間には恋愛感情なんて絶対生まれっこないだろうな。てか生まれてきたら困る。・・・のはずだったんだけどなあ。」

幼馴染の2人の恋のお話。

プロローグ

小さいころ翔太と一緒に手をつないで帰ったことがある。

その時に

「翔太の1番好きな人はだれ？」

って聞いた。

そしたら翔太はしばらく考え込んで

「由里ちゃんかなっ」

って返ってきた。

あたしの名前が出てきたのは8番くらいで、その頃かなりませてたあたしは翔太にむかついたことを覚えている。今思えばあたしだって翔太のことそんなに好きでもなかったのに、って笑えるけど。

でもまあこんな昔話は今になってはすごい助かっている。

どんな事しても翔太はあたしのことを好きにならないって知っているから。

だからあたしはかなり翔太を頼りにしてきたしなんでも話してきた。お互いほかに好きな人がいるし、なんでも言い合える仲だし、翔太といえるのはすごい楽だ。

翔太もそう思ってくれてればうれしいけど。

幼馴染 杏奈SIDE

マエハラシヨウタ

前原翔太。

バカでアホでどうしようもないムカツク奴。そんな翔太とはかれこれ10年くらい一緒にいる。

あたしと翔太が初めて会ったのは小学校の時。

保育所を卒業するとあたしは祖父母の家に近い学校に入学した。

親が離婚してお母さんが働きに出ているため昼は祖父母に預かってもらうことにしたからだ。

だけどあたしは保育所の友達と離れるが嫌だった。なんせその頃は人見知りする方だったから。

それでもやっぱり親の言うことには逆らえず、

「引つ越ししないんだから大丈夫。」と宥められてしぶしぶ祖父母の家に近い学校に入学した。

その学校は人数が少ないせいで全学年1学級だった。だから小学校6年生までクラスが一緒。

前行くはずだった学校は3クラスくらいあるって聞いたのに。車で15〜20分走るだけでそんなに違うものか、と驚いた。

で、入学して1週間。あたしは全くクラスになじめていなかった。

人見知りの方だったし、人に話しかけることができなかった。

そんな時だった。

「ねーねー！氷鬼こおりおにしない？」

そう話しかけてきたのは翔太。

びつくりしたけどすごい嬉しかったのを覚えている。

そして帰るときも翔太はあたしに話しかけてきてくれた。

「一緒に帰ろーぜ！！」

あたしはそれから翔太にくっついて歩いてた記憶がある。

あのころの翔太はすごい頼りがいがあったってかっこよかった気がするなあ……。

「牧屋!!」

「……」

「牧屋!!!!」

「何さ……。せつかく人が昔の思い出に浸ってる時に……。」

「しらねえよ。お前の思いでなんて。」

今はコレだよコレ（笑）

中学校も小学校2つで1つのクラスとはいえ、やっぱり人数が少なくてずっと同じクラス。

そして奇跡的に同じ高校に入学したあたしたちは5クラスもあるのに奇跡的に同じクラスになった。

もう10年目だ。かなり見飽きた（笑）

そしてやっぱり人は成長するもので翔太もかなり生意気になった（笑）。さらにかっこよくもなったらしい。（あたしは全くわかんないけど、結構モテるらしい。）

バスケットに入って急成長した身長はあたしより10センチ以上高い。クラスの中でもやんちゃなグループに入っちゃって。なのに頭はいいし。

思い切り青春しちゃってる。

「で、なしたの」

「ああ、この問題どういう意味？」

翔太が見せてきたのは塾の宿題のプリント。

「あー。ここは関係代名詞の……。」

「あ、これが。」

「そうそう。」

「さんきゅー。」

すぐ理解できるし。中学校の時にかなり勉強サボったくせに。

もともと頭いい翔太は学年の30番くらいには入ってる。あたしは一応10番に入ってるけど。

とりあえず翔太は何かとむかつくんだよなあ（笑）

でも

「てかさ。塾の模試、レベル高いし今回は特にむずかったんだからそんな気にならないからな。」

「は？」

「いや、お前氣にしてそうだったし。」

「なんでわかったの？」

「まゝ、長年の付き合いだからな。」

「はいはい、ありがとね。」

「じゃあドーナツおごって。」

「黙れはげ。」

「はげてねえよ！」

すごいいいやつ。

幼馴染 翔太SIDE

マキヤアンナ
牧屋杏奈。

バカでバカで超バカで・・・とりあえずバカだ。

まあ俺の頭はそんなにあいつを簡単に表せる言葉が入っていないからバカとしか言いようがない。

あいつに出会ったのは小学校1年生の時。

「やけに暗くてさびしそうなやつ」が第一印象。

あいつが言うには「人見しりで話しかけれなかった」らしいけど、あいつの辞書には人見知りって言葉はないと思う。

とりあえず、入学して1週間もたっているのに俺が見る限り友達はいなさそうだった。

だから俺は話しかけてみることにした。

そのときのあいつの顔、めっちゃ嬉しそうで、かわいいとさえ思ってしまうほど。

（まあその時以来、あいつをかわいいと思ったことはないけど）それからあいつは俺の後ろをよくついてくるようになった。

そして時は流れ今は高校生。

俺と杏奈は同じクラスになった。小、中学校と人数が少ないためずっと一緒のクラスだったため、かれこれ10年も同じクラスになるもう、さすがに見飽きた。といってもなんだかんだであいつは俺の幼馴染だし、友達だから一緒にいるわけだけでも。

だからあいつは俺にかなり気を許しているみたいだ。まあ俺も許しているけど。

よくお互いで好きな人の話をしたり、愚痴とかいろいろ話してる。多分お互い秘密をさらけ出していると思う。まあ10年も一緒にいれば隠すようなこともないか。

「ただ最近なぜか俺はよく女子に「杏奈と付き合ってるの？」って聞かれる。」

「そんなこと俺と杏奈の間には絶対ありえないことだ。」

「俺は杏奈のこと絶対好きにならないし、杏奈も俺のこと好きにならない。」

「だから今までこうして、いろんなことさらけ出てこれたんだ。」

「これからもそうなる。」と思う。

「で、最近あいつは少し元気がない気がする。理由はわかる。塾の模試の結果だ。」

「あいつは結構頭が良くて模試の順位もそれなりにいい。だからこそプレッシャーが結構かかっているんだと思う。」

「頭いいやつも結構大変だよな。」

「今回は一気に順位が20番くらい下がっていた。多分親か塾の先生にでもなにか言われたんだろう。」

「あいつ、結構わかりやすいから。だからかるく慰めてみた。」

「したら「ありがとう」ってあの時の笑顔で言ってくんの。別にかわいいとは思わないけどあいつはちゃんとお礼言ってくれるし、まあ・・・結構いいやつだ。」

「翔太ーっ!」

「まあうるさいのがかなりの欠点だけど。」

「なんだよ。うつせーな。」

「うつせーな、とは失礼な!」

「で、なしたの。」

「ああ、はい。きつと困ってんじゃないかと思って。」

「渡されたのは頭痛薬。俺は頭痛もちでよく頭が痛くなる。確かに今日はちよつと頭が痛い。」

「あんたさ、なんでだか知らないけど頭痛いときよくドーナツ食べ

たいつて言うの。それに今日調子悪そうだったじゃん？

あと・・・励ましてくれたお礼。ありがとね。」

「・・・おう。ありがとう。」

「どーいたしましてっ。」

そういつてあいつはそのまま中学校からの仲いいやつと教室を出て行った。

あいつはバカでバカでうるさくてとりあえずバカだ。

だけど、気がきくときもあるし、ああみえてちゃんと人のこと見てる。

それに俺はよく助けられてる。

あいつは本当にばかでどうしようもないやつだけどすごいいいやつだと思う。

ケチャップのみで。 杏奈SIDE（前書き）

ここからはほぼ杏奈SIDEになっています。
更新遅くてすいませんm（――）m

ケチャップのみで。 杏奈SIDE

あたし恋に落ちました。

あたしと、翔太と中学校からの仲良し、水城理緒ミスキリオはいつも放課後は塾に直行する。

その前に必ず寄る塾のななめ向かいにあるコンビニ。

そこであたしは運命的とでもいえる出会いをした。

「いらつしゃいませー。」

なんとなくそのコンビニで働いてる人と顔見知りになってきたあたしたちは声だけで

新入りかわかるようになっていた。（かなりすごいことだけど）

「理緒！この声新入りじゃない？」

「だねー。」

「お前ら誰だよ（笑）」

「翔太には言つてない。」

「うるせえチビ。」

「翔太も十分チビだけど。」

「水城がでかいんだよ。」

（ちなみに理緒は元バスケット部センターで身長は翔太を軽く越している。ということとはあたしと20センチは離れている。）

そんな会話をしながらいつものパンとジュースを買う。

（ちなみにあたしはスペシャルチョコスティックにリポトンのミルクティーにアメリカンドッグをいつも買っている。）

そして3人でレジに行った。最初は片方しかレジがあいてなくて理緒の後ろにあたし、あたしの後ろに翔太という順番で並んでいた。その時だった。

「すみません、お待ちの方こちらへどうぞ。」

あたしは呼ばれた方を向いた。そしてその瞬間、

恋に落ちた。

理緒の身長も余裕で超えるくらい、多分180?は余裕であるその身長に小さな顔に大きな目。

ひよろつと長くていかにも草食男子って感じ。少しマツシュ気味の茶色い髪が白い肌によく似合っていた。そして優しそくに微笑む姿もまた何とも言えなくて……。

あたしは少し固まってしまつて、気が付けば翔太に先にレジを越されていた。

急いでその店員さんがいるところに行く。

「ちょ、なに抜かしてんの!」

「お前がぼーつとしてるからじゃん。」

翔太は店員さんにお金を渡しながら言う。

「んなこと言われたつて……!」

「別にちよつと遅くなるだけじゃん。変わんねー、変わんねー。」

翔太はそう言つてお釣りを渡され後ろの方へ行つた。

あたしは店員さんを見た。

「いらつしゃいませー。」

……近。やっぱかつこいい。

「あの、アメリカンドッグください。」

ドキドキしながら言う。やばい顔赤くなつてないかな。

「マスタードつきとケチャップのみ、どちらにいたしますか?」

「あ、ケチャップだけで。」

そついうと店員さんは微笑んでアメリカンドッグを取り出した。

「え、何お前マスタード食べれないの?」

翔太が話しかけてくる。

「……知つてるくせに。」

「わさびもからしもマスタードも苦手なんだっけ？」

「そうですけど何か。」

「何も辛いもないのにー。」

会計を済ませた理緒もこっちにくる。

「無理。あのツーンとする感じとか！」

「ガキ」

見事に2人の声がそろつ。

「なっ……。」

「305円になります。」

用意していたお金を店員さんに渡す。

そのときネームプレートをちらつと見た。

『築波裕樹』つくばゆうき？ひろき？

最後に目があった。

営業スマイルで微笑まれただけなのに、すごい嬉しかった。

コンビニをでてすぐ理緒が

「あんたあの人タイプでしょ？」

と言ってきた。

「え、なんでわかったの！？」

「やっぱりねー。だってあんた趣味悪いし、ひよろつとした人好きだし。」

「あたし趣味悪くないんだけど！」

「え、誰だよ。」

翔太が聞いてきたけど無視した。

「筑波さんっていうんだって！めっちゃかつこよかったあ。」

「もう名前まで知ってるし……。でも背大きくない？なのに顔小さいし、キモイ。」

「理緒って趣味おかしいよ。てか目おかしい。」

「杏奈に言われたらおしまいだわ。」

「失礼な。」

「おい無視すんな。」

「うるさいな。あの店員さん！めっちゃかっこいいくない？」

「そんなよく見てない。」

「めっちゃイケメンだった！」

「んなこと言ってるって好きになっちゃまうぞ。」

翔太が言う。

あたしはかっこいいと言っていた人をそのまま好きになってしまっ
癖がある。

「もう好きだわ。」

理緒はため息をついた。

「あんたって・・・。」

「いやマジでマジで！」

本当にあの人を見た瞬間「運命だ」って思った。

「やばいあの人めっちゃかっこいい・・・。」

牧屋杏奈、恋に落ちました。

ケチャップのみで。

平日は毎日通っているコンビニ。筑波さんは結構バイトを入れてるらしくて、

月、水、木、金曜日はコンビニにいた。

その姿を見つけるたびににやけるあたし。ため息をつく翔太。全く気にしていない様子の理緒。

あたしは必ず筑波さんがレジにいるときは筑波さんの方に行った。

筑波さんはいつ見てもかつこよくて、あたしはずっとキュンキュンしっぱなし。

そんなこんなで1か月が経った。

あたしはいつものように築波さんのレジに並ぶ。

そしていつものようにアメリカンドッグを注文した。

「すいません、アメリカンドッグ1つ。」

「はい。ケチャップのみでよかったですか？」

「え……。あ、はい。」

築波さんはいつものように微笑んでケチャップとアメリカンドッグを袋に入れた。

「ありがとうございますー。」

あたしはレジ袋をもらって理緒と翔太を置いて放心状態のまま外に出た。

そして外に出てしゃがみこむ。

「やばいやばい。どうしよう。すっごい嬉しい。」

築波さんはあたしがケチャップしか頼まないこと覚えてくれたんだ。いつも通っているから覚えられるのは普通のことかもしれないけどすごい嬉しかった。

少しでも筑波さんがあたしのことで知ってくれたと思うと嬉しくて恥ずかしくてどうしようもなかった。

「あんたはどうしてすごい勢いで外に出てしゃがみこんでんの？」

「ものすごい変人だけど。俺お前の友だちっていうポジションがすごい恥ずかしくなったんだけど。」

「って、なんでそんな顔赤いわけ？」

「どうせあれだろ？ケチャップだけでよかったですか的なこと言われて照れたんだろ？」

さすが翔太はあたしの心を読んだ。

「別に照れてない。行こうか。」

「にしてもあんた本当にあの人のこと好きなんだねー。」

「そうみたい。今までで一番好きかも。」

「珍しいね。あんた今まで好きになった人はチャラチャラ系だったのに。」

「で、フラれるけどな。」

「うるさい黙って。」

あたしの好きなタイプっていうか、いつもかつこいって言う人は細いひよろした人だけど好きになる人はすごいチャライ人だった。チャラくて彼女がいつもコロコロ変わるような人。

で、その人には友達にしか見られてなくてあっけなく終わっちゃうタイプ。

でも今回は本気で好きになった。でも何にも進展もあるわけがないし。

ああ、あたしは何でこんな叶わない恋ばっかしてるんだろう。

「まあいつかはいい恋できるしょ。」

またしても翔太に考えてることがばれた。で、さりげなく励まされた。なんかムカつく。

「あんたこそ好きな人とかいないわけ？」

「いない。」

「そいえば美香と別れてから付き合ってないよね。未練でもあんの？」

「別に。あいつもう嫌いだし。」

「へえ。つてことは前は好きだったんだ。」

「・・・ウザい牧屋。」

翔太には3年の時に3か月くらい付き合っていた女の子がいた。あたしや理緒たちと仲が良かった他校の可愛い子で、翔太に一目ぼれしてずっと片思いしていたらしい。そして告白してしばらく付き合ってたんだけど別れてしまった。

翔太が言うにはノリがウザかったらしい。

友達と一緒におごらされるは、いろんな人にはからかわれるはですごいむかついていたらしい。

確かに翔太はそういうのが大嫌いなタイプだからな。

別れた後、翔太は「もうメールもしたくない」と言って美香のアドレスを消してしまった。

それから翔太は告白されても全員振っている。昨日も告られたらしいけど振ったらしい。

「お前こそどうなんだ、水城理緒。」

「もう塾に着いたんだからその話は終わり。」

「うわ、理緒鬼畜。」

「鬼畜の意味が違うけどね。」

理緒はちなみにいままで彼氏がいたことがない。というか作っていない。

よく呼び出されては振っている。のくせに「恋したい。」「彼氏ほしい」などと嘆いている。

それに比べてあたしは告白されたことなんて1度もない。なんかさびしいな。

「まあでも一番杏奈が青春してるね。」

「じきに散るけどな。」

「やめて。本当やめて。」

翔太の言うとおり絶対散るに決まってる。だって何の接点もないし。

でも諦められるわけがない。あーあ本当にあたしはなんで築波さんを好きになっただろう。

そんなこと思っていたあたしに神様は同情してくれたのかもしれない。

ケチャップのみで。

築波さんにケチャップだけでいいですかって言われて1週間。今もそうやって聞かれる。そのたびあたしはニヤニヤしてしまう。そして翔太に叩かれる。そんな日常。

あたしは、この恋は叶わないって半ば開き直っていて、築波さんを見ればそれでいいな。なんて考えていた。

そんなある土曜日の夜。

「杏奈ー。」

お母さんとテレビを見ながらグダグダしているときだった。

「なにお母さん。」

「から揚げ食べたいよねー。」

嫌な予感がある。

「・・・そうだね。」

「でさ、ビールとアイスも食べたーい。」

「太るよ?」

「・・・ねー行ってきたくない!?!」

ハア。やっぱりな。

「お金ちょうだい。」

「やったあ!ありがと杏奈ー!」

あたしはため息をついてお母さんからもらったお金をもらってコンビニへと向かった。

築波さん働いてないかなーなんて都合のいいことを考えてたけどやつぱりいなくて、

適当にアイスとビール、ジュースお菓子なんかも買った。

会計を済ませて袋を持ったら結構重かった。

・・・まあビール5本にジュース3本は買いすぎたかなあ。

袋の中を見ながらそんなことを考えつつドアへと向かう。

その時だった。

「どうぞ。」

突然開けられたドア。

「あ、ありがとうございます。」

お礼を言ってその人の顔を見る。

袋を落としそうになった。

「つつ……。」

築波さんだった。バイトがちょうど終わったの鞆を持ってニコニコと立っている。

「つつ・つ……。」

顔が熱くなっていく。多分顔が赤くなっていると思う。

「？」

築波さんは不思議そうな顔をしている。

そして

「あ、いつも寄ってくれる子だね？ケチャップの子でしょ？」

あ、もうなんか泣きそう。嬉しすぎる。

築波さんはニコニコと笑っている。

「はい……。」

「マスタード食べれないんだっけ？」

「はい……。」

本当にこれ夢じゃないかな。だとしたら一生覚めてほしくない。なんてありがちなことを考える。

「てか。すごい量だね……。重くない？」

築波さんはあたしのレジ袋をみて言う。

「ああ、ちよつと重いです。お母さんに頼まれたんで……。」

「そっかあ。すごいビール買ってるもんね。」

築波さんは笑いながら言う。
あたし会話しちゃってるよ。

「持とうか？」

「・・・は？」

築波さんが言った言葉が理解できなかった。

「あーおせっかいかもしれないけど持とうか？重そうだし。」

「いや、あの、え？あの、はい。お願いしたいですけどあのー、はいすいませんお願いします。」

『遠回りになりませんか？』とか『そんないいですよ！』とか『いやでもやっぱり少しお願いしたいです・・・』なんてたくさんの言いたい言葉が混ざっておかしなことを言ってしまった気がする。

また顔が熱くなる。

うわぁもう恥ずかしい・・・。

そう思っていたら築波さんは笑いだした。

「ハハッ！アハハハ・・・。結局持っていていいんでしょう？夜だし送っちゃっていい？あれ？俺が送っても大丈夫なのかな？」

「お、送る！？あの、家大丈夫ですか？遠くないですか？」

やつと言いたいことの1つが言えた。

「ん？ああ大丈夫だよ。気にしないで。そっちこそ送ってもいい？迷惑かな？」

なんて言うから激しく首を振った。

「そんな！迷惑なんかじゃないです。すごい嬉しいです。ごめんなさいお願いします。」

築波さんはまた笑った。

よく笑う人だなあ。と思った。

「じゃあ・・・。はい。」

といって手を差し出してきた。

・・・え？この手は何？え！？

あたしの頭は真っ白になっていたので、なぜかその手を握ってしま

った。

沈黙が流れる。

・・・あれ？あたしなんで握手してるんだ？ん？

また筑波さんが笑い出す。お腹を抱えて笑っていた。

あたしは恥ずかしくてこれ以上ないというくらい顔が赤くなっていたと思う。

「ちが・・・。ちがうよ。握手・・・ぶっ！アハハハハハ！！！！袋だよ！ああおもしろい。」

「あ、そつか！本当ごめんなさい。」

「ハー。おかしー。全然いいよ。今度こそどうぞ？」

「ありがとうございます。」

あたしはそういつて袋の片方の持ち手を差し出す。

築波さんは不思議そうな顔をした。

「？持つよ？」

そういつてくれたけど、レジでよく見ていたとはいえ初対面の人にすべて持たせるわけにはいかない。

「半分持ちます！だって初めて話す人に全部持ってもらうなんて・・・。」

そういつと築波さんはまた笑いだす。

あたしとだけ笑われてるんだろう・・・。

「本当おもしろいね！ありがとう。じゃあ半分個ずつもとつか。」

そういつてあたしと築波さんは袋を半分個ずつ持って歩き出した。

さつきは話を理解したりすることに一生懸命だったけど、少し落ち着いてくると心臓の音がすごい早くてすごい大きな音を立てていることに気付いた。

「あ、俺、築波^{ツクバヒロキ}裕樹^{ヒロキ}って言うんだ。高2だよ。」

「あたし牧屋杏奈です。高1です。」

「杏奈ちゃんか。よろしくねー。あ、俺のことは裕樹でもなんとも呼んでいいよ。」

神様あたし今すごい幸せです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8379w/>

トモダチ

2011年11月3日02時12分発行